

ジャムズネット東京メンバーインタビュー 第1回

聞き手：池田みどり

ジャムズネット東京は、世界で活躍する医療関係者からボランティアまで、素晴らしい人材が揃っています。このシリーズでは、みなさんにメンバーをご紹介します。

第1回は、ジャムズネット東京の代表でもある、仲本光一氏。現在は医務官としてタンザニアに赴任されています。彼はジャムズネット(NY)の生みの親でもあります。

■仲本光一氏(タンザニア在住)

外務省医務官。

略歴：ミャンマー、インドネシア、インド、NYの大使館・総領事館勤務を経て、
現在タンザニア日本国大使館勤務。

ホームページ：[「博士と助手」](#)



タンザニア・キリマンジャロを背景にして

・医務官になる前は何をしていましたか？

日本で病院に勤務する消化器外科医でした。大学医局から指定される地域病院で一般の医師として勤務し、また大学で研究も行っていました。

・外科医から医務官になろうと思ったのは、どうしてですか？

外科医は10年程やって、職人として技術が上達するのを実感できるという面で楽しい仕事でした。10年で一通りの手技をさせてもらえました。しかし、実際毎日の病院暮らしでは、付き合う人々や接する社会が狭いことに気づき、より広い世界、外国での生活を夢見るようになりました。そんな時、医局の先輩が医務官をされていると聞き、その方から話をうかがい、面白そうな仕事だと判断し、医務官になりました。その先輩曰く、「医務官は出世もしないし、お金儲けも出来ないが、いろんな体験が出来る興味深い仕事である」、と聞きました。実際、そうでした。

・医務官ってどんなお仕事ですか？

海外にある日本の在外公館(大使館や総領事館)に勤務して、外交官とその家族の健康管理を行います。在留邦人や旅行者からの保健相談に応じます。現地の医療事情や流行病を調査し、一般向けに広報します。海外で災害が発生した場合には、緊急的に邦人援護を行います。

・医務官を今までやっていて印象的な出来事は？

私の場合は、特殊かと思いますが、いろんな経験をさせていただいています。

ミャンマーでは、自分一人しか頼りになる医者がないという状況で、医師としての精神的な覚悟が出来ました。

インドネシアでは暴動を経験し、危機管理を学びました。

東京勤務中には、私にとって、最も印象的な出来事がありました。えひめ丸事故の家族支援を担当し、家族・遺族支援の得難い経験をさせていただきました。また、北朝鮮拉致被害者支援もしました。北朝鮮には3回出張いたしました。この問題は、未解決であり、被害者家族の高齢化を考えると、一刻も早い解決を願っています。

インドでは精神障害者の対応方法を数多く経験させてもらえました。

ニューヨークでは、優秀で意識の高い多くの邦人の方と接し、そして一緒に仕事をさせてもらって大変幸運でした。

タンザニアでは、アフリカの自然のすばらしさを体験させていただいています。

・ジャムズネットを組織した、いきさつを教えてください。

インドからニューヨークへ転勤したわけですが、先進国であっても、邦人にとって現地の医療を利用することには多くの困難が伴うことがわかりました。このため、ニューヨークには邦人を互いに助け合う団体が多数出来ていました。総領事館で勤務することにより、そうした多くの団体の方と接することができましたが、団体同士の横のつながりがあまりないことに気づきました。また、当時の米国日本人医師会会長の本間先生も、医師会としてコミュニティ支援をより積極的に行いたいとの希望を表明されていました。そこで、本間先生に代表をお願いして、こうした自助団体を連携するためのネットワーク作りをすることになりました。ニューヨークは、9.11を経験し、邦人同士のまとまりを求める機運が高まっていたのがその背景にあるのだと思います。当初は、団体相互の連携・情報交換を目的として集まっていたのですが、ネットワーク全体として一般への啓蒙活動を行っていきこうということになり、さまざまな医療イベントを行うようになりました。

・ジャムズネット東京はどのようにできたのですか？

ニューヨークのジャムズネットの活動(コミュニティ支援)に興味を示される日本の医療専門家の方がいらっしゃいました。また、ニューヨークから帰国され日本に戻られた方も、ジャムズネットのような活動を継続したいとの気持ちを持っておられるかたが多くいました。こうした方々の情報交換のためにジャムズネット東京が作られましたが、本家と同じように、一般の方々への啓蒙活動を行っていかうということになり、ホームページを立ち上げ、情報発信を始めました。

・メンタルヘルスも大切だとお考えのようですが、どうしてですか？

元々外科医でしたから、メンタルヘルスケアには最も遠いところにいました。海外に出てわかったことは、体の病気であっても、その背景には異文化ストレスを含めたメンタルヘルスが強く関係しているということです。しかし、海外では、優秀な外科医、内科医はいませんが、邦人をメンタル面で支援できる医療者は少なく、メンタルヘルス面では医療過疎の状態です。海外で医師として勤務しているため自分自身がその役割を求められることが多くなり、努力しているところです。

・これからのジャムズネット、およびジャムズネット東京の課題と目標を教えてください。

ジャムズネット東京には、本家ニューヨークに負けない位素晴らしい人材が参加しています。今後こうした優秀な人材が有機的に生かされるように考えていきたいと思っています。まずは、海外生活者や海外からの帰国者について医療面でのアドバイスを行っていきます。新型インフルエンザの発生でわかったことですが、ニューヨークや海外の情報は日本の方々にとっても有用なことが多く、また海外のやり方から学ぶことは多くあります。特に、患者が医療をリードしていくことは米国では一般的であり、日本も学ぶべき姿勢の一つであると思います。7月に予定している横浜の乳がんシンポジウムでは、こうした患者さんの意識を高める、すなわち患者力を鍛えることについてもテーマとして、国内の患者団体の方々とは話し合っていきたいと思っています。